文 学 を 幻 想 す る

看護学部特任教授　黒川博一（2022.6.26）

「・・・部屋は非常に狭く、天井は低かった。その内部は、白っぽい臓器に似た寝具とそのうえでもつれあっている短い腸管のような人間たち、灰色に毛ばだったカーテン、それにロープからたれさがるおびただしい下着類からなっていた。そして異臭と熱気をはらんだ濃密な空気がわたしの肺をしめつけた。部屋の内部が多くのひだをもち、乳白の光を澱（よど）ませているのは、ある種の巨大な貝のなかをのぞきこむようだ。・・・」

（新編・日本幻想文学集成 第１巻 倉橋由美子「貝のなか」より）

洋の東西を問わず、幻想文学というジャンルが存在します。若い頃、シンクレール的な“微少年”を気取った当時の私や仲間たちにとってマックス・デミアンは圧倒的な憧れであり、ヘッセの「デミアン」こそが幻想文学の象徴でした。

高校進学を機に、1975 年から刊行された世界幻想文学大系（国書刊行会）第 1 期の全 15 巻を初版で揃えました。当初はブラウン神父シリーズなどで知られるチェスタトンやほかのいくつかをつまみ読みしていましたが、次第に、多くの作品の読解には遠くギリシア・ローマ神話や宗教、中でもキリスト教の深い素養が必須であることに遅まきながら気付かされ、蔵書は本棚の展示物に甘んずることとなりました。今も我が家の書斎（兼物置）に特異な存在感をもって陳列されており、この分厚く立派な装丁の叢書を寝転がって持ち上げる腕力が残っているうちに読み直したいものだと思っています。

pseudo-シンクレールの視線は自然に日本文学に向き、その先に夢野久作、稲垣足穂、小栗虫太郎、久生十蘭らがいました。新編・日本幻想文学集成 全９巻にこれらの懐かしい名前に加え、谷崎潤一郎、江戸川乱歩、宮沢賢治、川端康成はもちろん、夏目漱石、森鴎外、芥川龍之介、三島由紀夫などの名前を目にして、日本文学の根源は幻想にあり、と改めて思い至ります。例えば、泉鏡花の流麗な日本語遣いによるいざないは海外文学では得難い快感です。

冒頭の「貝のなか」はこの日本幻想文学集成 第１巻「幻戯の時空」に収載された倉橋由美子の初期（1960 年）の作品で、実際の女子寮経験を元にしたというＰ・イクラ、Ｖ・スジコ、Ｙ・タラコとの共同生活が描かれています。文学の世界に女流という言葉が残存していることを許容していただければ、昨今の芥川賞はまさに女流の百花繚乱です。倉橋由美子（1935-2005）が 60 年以上前に残した作品の切れ味は現世の百花先生たちをはるかに凌駕すると個人的に思いますがしかし、彼女の最終履歴は芥川賞候補作家でした。

新編・日本幻想文学集成 全９巻（国書刊行会　2016 年）

第１巻 「幻戯の時空」　安部公房、倉橋由美子、中井英夫、日影丈吉
第２巻 「エッセイの小説」　澁澤龍彦、吉田健一、花田清輝、幸田露伴
第３巻 「幻花の物語」　谷崎潤一郎、久生十蘭、岡本かの子、円地文子
第４巻 「語りの狂宴」　夢野久作、小栗虫太郎、岡本綺堂、泉鏡花
第５巻 「大正夢幻派」　江戸川乱歩、稲垣足穂、宇野浩二、佐藤春夫
第６巻 「幻妖メルヘン集」　宮沢賢治、小川未明、牧野信一、坂口安吾
第７巻 「三代の文豪」　三島由紀夫、川端康成、正宗白鳥、室生犀星
第８巻 「漱石と夢文学」　夏目漱石、内田百聞、豊島与志雄、島尾敏雄
第９巻 「鴎外の系譜」　森鴎外、芥川龍之介、中島敦、神西清、石川淳

※当館では、ご紹介いただいた第１巻をはじめ、シリーズ全９巻全て所蔵しております。（請求記号 918.6：Sh69）